

インド報告

2006年3月19日(日)～3月26日(日)

出発まで

インドでの心強い“相棒”だった花谷めぐむさんが、今回どうしても同行できない。「いいよ、いらっしゃい」という訪問の承諾も、インドの人たち、なかなか返してくださらない。おまけに連日の活動でくたびれ、体調も良くない。“ないないづくし”で日が過ぎる…
光が見えたのは、岡山大学の岡田さんが、7名の若い人たちと、ムンバイでの最初の2日の行動を共にして下さることが決まった時。(岡田さんは、出発直前にホテルをキャンセルされて途方に暮れた私が、同じ宿に泊まれるよう、すぐに手配もして下さった)
インドに詳しい義村さんとも、現地で合流できることになり、「なんとかなるわ」と家を出た。

西村ゆり



3月19日(日)

自宅(MKタクシー) 関西国際空港
(AI315) 香港 デリー ムンバイ

インド入国8回目

8:25 西村宅発 MK スカイゲイトシャトル(乗り合いタクシー)は、スムーズに、10:30 関空に到着。(名神高速に入らず、山あい大きな虹が見えた。思わずとなりの席の若い女性に「ラッキーですね」と話しかけた私。虹に祈ってしまった。いい旅になりますように...体が一週間もちますように...)

11:00 関空中央団体受付カウンター前で、岡山大学一行と初めて顔を合わせる。びっくりするほど若いお嬢さんたち。大学生と聞いて、茶髪のお兄ちゃんたちがワサワサ来るのかと思っていたが、全員黒髪の、まじめで賢そうな女子学生。しかも可愛くて元気いっぱい。岡田さんは、年長の唯一の“男性”として、引率の先生・ツアーコンダクターの役割を一生懸命果たしておられた。『大変ですね。2週間、インドでがんばって下さいね』と、心の中でエールを送った。

いつも、うんざりするほど長いエア・インディア(AI)の空の旅。今回、最後の1時間が、眠くて死にそうなのに寝られなくて辛かった以外は、とても楽しかった。(本に夢中だったせいもある) 機内食、“なつかしや～エア・インディアの味だ～”...で、何と!3回、残さず全てたいたらげた。(非常に苦しかった)

インドでは普通なのかもしれないが(失礼!）、確たる理由もなく(多分)飛行機は2時間遅れて23:55 到着のはずが、02:00 ムンバイ着。BLP から、面白いお兄さんの車でのお迎え。2人の弟さんまで何故か一緒。インド人の男性が3人そろると、なんでいつも「3バカトリオ」(またまた失礼)みたいにに見えるんだろうと思う。テンションの高い明るい性格、いいかげんさ、大人とは思えない無邪気な振舞い...。「21日に、モンスークラスに大学生8人と行くからね。みんな若くて可愛い女の子よ」と言うと、3人とも大はしゃぎだった。(すみませんね。実はその内の一人は男性ですが...。もひとつ、女の子の内一人は15歳の中学生です)

メタさんの家を探して、3バカトリオ(重ねてすみません)と私を乗せた BLP の車は、未明のムンバイの街をうろろ。着くのかいな、といいかげん不安になってきたころ、ようやくメタさん宅(豪華なマンション)に到着。メタさんは、正装して待っていて下さり、「すぐにシャワーしていらっしゃい。それから、私とティーと夜食をとりながらお話ししましょ」と言われる。本当は、さっさとシャワーして寝たかったのだけれど、一生懸命急いでシャワーと着替えをし、メタさんとお話。メタさんは、めぐむさんが、今回一緒にないことをとても残念がっておられ、彼女から頼まれた“インドの食材”(ヒンディー語の先生デリー出身のインド人からの依頼。いつか教室の“デリー支部”設立の折には、必ず力になって下さるとか)のリストをお渡ししたら、「任せておきなさい」と、胸を張られた。(頼もしい)

荷物を整理して、やっとほっとしたのが、朝の4時。いつもこんなスタートだ。

3月20日(月)

〔ムンバイ〕



メタさん宅で

8:00 身仕度をすませ、8:30 メタさんと朝食。メタさんちのオムレツは、薄くてスパイスが効いていておいしい。リンゴのサラダ、チーズ、ミルクティーもいただく。メタ家の使用人をしている男の子が、あっという間に“めぐむリスト”の食材を買ってきてくれた。あまりの量に驚く。粉やら豆やら、何なのがよく分からないボトル(5本!)やら、優に10キロは越えている。帰りの税関、きっと大変だぞ... (岡田さん! 義村さん! 荷物運び助けて下さいね!!)

電話で、BLPへの連絡とホテルの予約の確認をさせてもらい、携帯電話のリチャージ(カードを買って、手持ちのモバイルフォン 義村さんからもらったものを再び使えるようにすること)については、お嬢さん(上の階に住んでいる)に頼んで下さるとのこと。(この方と、20年以上前に京都でお会いでき、年一度のクリスマスカードの縁が続いていたことに本当に感謝。この方やBLPの、全面的なバックアップがなかったら、とてもこれまでインドでやってこれなかったし、今回一人で来る気にもなれなかったら)

おいしいインド料理の昼食のあと、メタさんも、3人のメイドさんたちもお昼寝してしまい、「13:00に、ホテルまで車で送るよう、BLPのパイさんに頼んであげる」(メタさんはお医者さんで、BLPの副所長?であるドクター・パイは、医学部での“教え子”なのだ)と言っておられた。なのに、14:00を過ぎても家の中はシーンとしたまま。携帯のチャージの件もどうなったのか...。(メタさんは忘れておられ、結局そのままになった)やっと15:00前にメイドさんが電話で起き、「あと10分で車が来るそうよ」やれやれ...『インドやな~』と改めて思う。この時間の流れに早く慣れなくては...

紅茶とクッキーを楽しみながら、15:00まで、メタさんにこれまでこのお宅に泊まったメンバーそれぞれの近況を報告する。メタさんは、一人一人をととてもよく覚えておられ、気にかけておられた。この方は本当に優しい。病気で1ヶ月も入院しておられ、退院されたばかりと聞いて、心から申し訳なく思った。いつも最大限のことをして下さって、本当にありがとうございます。メタさんは、“めぐむ”のことばかり訊かれ、今回会えないことをとても淋しがっておられた。(“めぐむ”になるので、何のことが最初分からなかった)メタさんは、自作の“童話”についても話してくださった。二匹の猫が、チーズをめぐる争う話。シェア(分け合う)することの大切さがテーマというメタさんらしいストーリー。

SeaLoad ホテルにおのいた

15:00すぎ、BLPの車がお迎えに来てくれて、Sea Load ホテルへ。ごみごみした強烈な通り(路上に隙間なく、堂々とトタン張りの“住宅”が連なっている。一軒の大きさは畳2畳分もない)を走り続け、その中に建つホテルに着いてびっくり!なにこれ?ネットで見た写真と全然違うよ。窓なんか割れたまんまじゃないの!!ひとこと言うと“汚い”。古いし、インド的というか(すみません)徹底的に大ざっぱ。むんむんと漂う怪し気な気配。これは危ないかも...。しかし、ここに着くまで、真っ黒に煤けた「家」の連なりを見ながら『こんなところに“住む”としたら、私、どう感じるのかなあ。まず、生きていられるかなあ』と、「道の家」に住む自分を想像しようとしていた私。これはまたとない“実験”のチャンスかも、と気を取り直す。しかし...ペンキを半分だけ塗って、放り出したまんまのところもあちこちあるぞ。(そのペンキも配色がすごい。緑とショッキングピンクだ)

部屋に入り、念入りに点検。「バスルームのシャワーは出る!トイレは...流れにくいけど“一応”流れる。エアコンもあるし、コンセントも使える。よし!OK」
困るのは、呼びもしないのにしょっちゅうボーイさんが勝手に入ってくること。(ドアにスライド錠が付いていることに気付かなかった私が悪いのだけれど...)「トイレトペーパーくれる?」ときいたら、2回も持ってきたし、ついでにコーヒーを頼んだらこれも2回持ってきた。でも、このボーイさん可愛いかった。まだ、13,4歳に見える。ディワナ君とか。彼からヒンディー語を習おうかと思ったが、ディワナ君は英語が全く話せなくて、コミュニケーションが難しい。私が何を頼んでいるのかを理解するまで、とてもおかしい間違いをする。(たくさん笑ってちょっと気が楽になった。彼も一緒にとびきりの笑顔で笑ってくれた。意味がわからなかったらうけど ありがとう、ディワナ君!)

インドでの孤独なあがき

チェックインの時、フロントで「列車のチケットを買いに出ています。夕方帰ります」という、岡田さんからのメモを受け取っていたので、私からも、フロントに、「夜にお会いしましょう」と伝言メモを残し、ホテルを出て、一人でタクシーに乗ってインド門まで。

明日(21日)のディナーのために、タージマハールホテルのレストランを予約して、携帯電話をチャージして、マーケットに行って日本から頼まれた物を買って...と、これから自分がすることを確認。まずは腹ごしらえ、とタージホテルのレストランでドーサを食べ...ようとしたが、そのサイズにびっくり。とても食べ切れない。レストランのおじさんに予約を頼んだら、「予約は受け付けていない」と言われた。「とにかく明日の晩 11 人そろっておいで。席が空いていたらディナーをやればいいよ」といいかげんやな。(去年、ここで同じことを言われたっけ、と思い出す)携帯電話のチャージについては、路上の屋台のお兄ちゃんに「ピザのコピーも要るし、本体の充電もしていないようだから、明日また来てね」と軽いなされ、買い物では、さんざんつきまとわれ...で、独りインド人と戦って、みじめな敗北を喫した気分。タクシーでホテルに戻る時も、わけの分からないうちに、何故か怪し気なお兄さんに、インドの地図を買わされていた。(むちゃくちゃ安かったけど)これまで、花谷めぐむと“二人で”何とかやっていたのだと痛感。私一人ではとてもインド人に太刀打ちできない。あたりまえか...

大学生に元気をもらう

ホテルに戻り、「あ～、前途は厳しいなあ。やれるのかなあ」と落ち込みそうになるが、20:30 となりの部屋で、初めて岡山大一行と明日の打ち合わせを行い、若い人の熱気に触れて元気が出てきた。初めての海外、初めてのインドで、彼女たちはこのホテルを受け容れ、今日は3時間も(!)このすさまじい街を歩いたのだそうだ。岡田さんは、40歳以上も年下の“同級生”に「純爾さん」と呼ばれ、完全に彼女たちの輪の中に溶け込んでおられる。全員、明日のモンスーンクラス(光の教室)訪問のために、本当に一生懸命、歌や遊びの準備をしていた。(岡田さんが作ったという、“旅の冊子”を見て驚いた。旅の心得から持ち物にいたるまで、学校の修学旅行の冊子よりも詳しい。これは親御さんも安心だ)でも、「ホテル」のところに“未定”なんてあるのは...^^;)このホテルも、そう悪くはないのかもしれない。一応レストランもルームサービスもあるし、こうして会議も出来る。何より2日しかない合流期間、この人たちと“一緒にいる”ことはとっても大事だし、本当に楽しい。多少(かなり)の汚さにめげてしまう情けない自分を反省しつつ、インド初日終了。ゴキブリさん出ないでね、と、汚いベッドで寝る。

3月21日(火)

[ムンバイ]

パスポートやーい

8:00 ホテルのレストラン(と言えるのか)で岡山大一行と朝食。朝から皆さんすごい食欲。たくましい。今日は、9:30 に BLP の車がここまで迎えに来てくれて、モンスーンクラス(光の教室)訪問の予定。

今日こそ携帯をチャージするぞ!と、朝食後、フロントに「ピザのコピー、ここで出来る?」と訊くと、「ここではできない。外に出て自分でやっておいで」その時フロント近くにいたスタッフのお兄ちゃんが、「おれ、行ってきてやるよ」と、私から10ルピー受け取ってすたすたとホテルを出て行った。あれ?あれれ...??と、急に不安になり、お兄ちゃんの後を追ってしまった私。私のパスポート、売ったりしないでよー!道の真ん中で、お兄ちゃんは、きつ、と振り向き「大丈夫だからホテルで待ってけ」でもね～...。BLP の迎えの車も来てるし、(どうも集合時間にずっと遅れているような気がしていたが、私の時計、30分遅れていたことがこの時点で判明する)パスポートは、お兄ちゃんと一緒にどっか行ったまま戻ってこないし、“これはシャレにならないよ”と焦る。半分泣きそうになっていたところに、涼しい顔をしてお兄ちゃんが戻って来た。ちゃんとパスポートもピザのコピーも持っている。「インド人、信頼して良かった!ありがとう!」と、思わずお兄ちゃんの手を握り、あなたいい人ね、と感謝する。コピーしたくらいでこんなにお礼を言われたこと、この人初めてなんじゃないかしら。

モンズークラス（光の教室）

岡山大学の8名と私、BLPのバンにきっちり詰まって、モンズークラスのあるアクウォース病院へ。

10:00 モンズークラスの子どもたちと再会。私たち一行を大歓迎してくれた。

まだガナパティ所長もパイさんも来ていないのに、日本から子どもの人数分持ってきたカード（去年秋、教室の子どもたちが描いた絵の中から5枚を選び、子どもたちの写真も含めた計6枚を“ポストカード”にしてセットしたもの。日本で1セット300円にて販売中）を一人一人に配る。子どもたち、大騒ぎして喜ぶ。袋を開けて、中のカードを1枚1枚見せると、自分が描いた絵なのかどうか、どの子も覚えていない様子。でも、自分たちの絵が、きれいなカードになっていることは分かっているようだ。6枚目に自分たちの写真のカードが出てくると大興奮。自分が写真の中によろこぶ感じが、これもどっちでもいいという感じ。プレゼントとして、これを持ってきて良かったと思った。（重かったけど）

岡山大の人たち、昨日の夜のミーティングで練習した「ぞうさん」ヒンディー語版を披露。（去年10月、めぐむさんはこの歌の歌詞をヒンディー語に訳し、日本語とヒンディー語を併記した、かわいい象の絵付きの見事な“歌詞カード”を作った。私は、出発前にそのカードを岡田さんに送り、「練習しておいてください」と言ってあったのだ）子どもたち一人一人にも歌詞カードを配ると、また大喜び。このきれいな紙には、自分にも“読める”字があり、意味も分かり、一緒に歌え...てはいなかったが、この歌を選んだことはヒットだった。大声で合唱。その後の「カエルの歌」も「故郷」も大ウケ。岡山大学学生7名、クラス中学生1名 岡田さんのお嬢さん による“光の教室デビューコンサート”は大成功！

歌の間、私はずっと年長の少年たちに感心していた。彼らは体も大きく（学生さんたちは、彼らを生徒ではなく“先生”だと思ったそう）落ち着いており、本当に良く小さい子の世話をする。歌の後の“折り紙講習”では、うまく折れない子を実に上手に助けていた。子ども同士の自然なつながり、役割を心付いた、無駄のない動作。いいなあ、と思う。いつの間にか教室に来ていたガナパティ所長もパイさんも、日本の若い女子学生（とても若くて中学生くらいに見えたよ、と後日言っておられた）たちの、一生懸命な様子を、本当にうれしそうに見ておられた。



この教室を運営してきたSr.（シスター）セラフィンは、私を彼女の傍らに座らせて、手を握りながら、「この仕事は、私のたったひとつのduty（義務）だった。私、もう80歳よ」と言われた。

「あなたの人生の、大事な、すてきなdutyですね」と答えながら、胸がいっぱいになった。

この人と、もっと話さなくては。毎日子どもたちがどうしているのか、これまでどのような苦勞を経てこられたのか、私たちはまだ本当のことをよく知らないのだ。

「明日、私はもう一人別の日本人と、またここに来ます。そして、25日も来ます。25日には、どうかあなたと直接二人だけでお話をさせてください」「喜んで」と、シスターは私を抱きしめた。

シスター・セラフィンは、私に一人の女性を紹介された。彼女はいくつなのだろう。とても若いのかも知れないが、ハンセン病が顔に出てしまっており、ひどく痩せて、苦しい生活をしている様子だった。

でも、この国では、貧しい暮らしをしていても、本当に素直に人を受け容れる人が多い、といつも感じる。彼女も、嬉しそうに私にぴったり体を寄せ、笑顔で“happy”を繰り返していた。名前すら覚えられなかったけれど（ごめんなさい。インドの人の名前、難しいのよ）この女性と友達になれてうれしかった。



パイさんには、BLPのベテラン女性ワーカーを紹介される。彼女の手には、克明な子どもたち一人一人の、“調査書”のファイルが。「オフィスでコピーして、今晚、ディナーの席で渡すよ」ありがとうございます！

子どもたちのステージ、そして給食

岡山大のお姉さんたちのステージに触発されたのか、子どもたちはいつものシャイさを忘れて、「私も！」「ぼくも！」と代わるがわる歌や詩の朗読を披露してくれた。すごく楽しいが、段々エスカレートしてきて、終わりそうにない気配。テンションも上がる一方で、何が何だかわからないくらい混乱してくる。

学生さんたちが、かなり疲れているように見え、強引に、去年のコンサートでも使った「絵本」で、子どもたちをこちらに向かせ、「野ばら」を歌う。やたら高い声の、ながーいフェルマータ（“音を長く保つ”という音楽用語です）に、子どもたちは、一瞬唖然としたあと大笑い。（成功！空気が集中したぞ。）変わったものが聴けた、と喜んでこちらを見ている間に「最後に日本のディーディー（お姉さん）たちと、もう一回“ぞうさん”を歌って終わりにしましょうね」と無理やりまとめる。勝手に場を引っ張るのは、自分でも悪い癖だとは思いますが、こうでもしないと終わらない。

大声で暴れる“象”を、何とかひとつのメロディー（歌）にしたくて、インドの子どもに歌のレッスンを試みるが、すぐに無駄だと悟った。第一、そんなことをしても意味がないと思った。この子たちは、リズムもメロディーも全く違う世界で、楽しく生きているんだから…。で、酔っ払ったような「ぞうさん」の大合唱で、クラス終了。



12:30 ます外で全員で記念写真を撮り、給食の時間。

男の子、女の子、向き合ってきたんと列になって地面に座り（ランチルームは庭？なのだ）、おとなしく自分の前にカレーのお皿が置かれるのを待っている。給仕役は年長の少年たち。気配りが見事。食事の前のお祈りの声もぴたっとそろっている。（「ぞうさん」とは大違い）

私たちは、BLPのガナパティさん、パイさん、スタッフの女性、シスター、そしてアクウォース病院のチマルギ院長と一緒に、病院内の大きなホール（小型の体育館が倉庫のようなところ）でおいしい昼食をいただく。ガナパティさんは、若い女性に囲まれ、楽しそうだった。

Sea Load ホテルの手品師

14:00 すぎ、大騒ぎの教室訪問を終えてホテルに戻る。

18:00 のディナー（また BLP の車が来てくれる予定）まで、ひとときおやすみタイムをとることに…。やはり疲れたのか、眠くてたまらず、シャワーも洗濯も夢見心地で済ませ、そのままベッドへ…と、いきたかったが、セント・キャサリズホームのシスター・ウダヤに、今回は訪問の時間がとれないことを伝える必要があり、電話をかけるためフロントに降りた。やたらとボタンの多い壁掛け式の大きな電話機。「どうやってかけたらいいの？」と、フロントのおじさんに声をかける。「お金はあとでいいから、そのままダイヤルしな」はいよ。それまで、あちこちから電話を試み、いつも「番号が違います」という録音の声しか返ってこなかったのに、一回で本人につながる。インドでは電話までが不思議だ。（単純に番号を押しまちがえていただけかぁ、と気付いたのは、これを書いている今！）

ずっと私たちを案内して下さっていたシスター・ジョリン。出発直前にメールを下さり、お父さんの病気で返事が遅くなったこと、彼女自身が別の施設に移られることを報せてこられた。シスター・ジョリンは後任として、シスター・ウダヤを手配して下さっていた。

シスター・ウダヤは、「今回会えないのは淋しいわ。次は必ず来て下さいね」と、優しい声で言われた。グッときた。ご迷惑かと思うのに、温かく接して下さってありがとうございます。シスター・ジョリンともう会えないのはショックだけれど、この方との縁も大切にしないで...

フロントのおじさんに「電話代いくら？」と訊くと、5ルピーだと言われ、5ルピー玉を手渡す。まじめな顔をして、おじさんは5ルピー硬貨を自分の眉間にはりつけ、やおら“お祈り”のポーズ???一瞬の後、彼の額の5ルピー玉は、合わせた手の中に移動していた！下手くそだけど、突然の“手品”にびっくりして、アハハと大笑い。「も一回やって」と言ったらフロントにいた別のおじさんが大笑いした。手品のおじさん、しぶい顔に戻り、「またこんど」インド人あほや~と思った。（私もだけど）

ディナー（タージマハールホテル・レストラン）

部屋でやっと横になったら、すぐディナーの時間。

眠いのを我慢して、いつものパンジャビスーツ（私の唯一のインドでの正装）に着替えてフロントへ。岡山大の女の子たち、彼女たちなりに考えた素敵な姿。何人かは、私が昨日の晩プレゼントした鮮やかな色のスカーフをしている。（みじめな買い物での数少ない戦利品。1枚150円位だった。これが1枚あると何かと便利なので、全員にプレゼントした）とってもいいけど、ちょっと、建設現場のおじさんが首に巻いているタオルみたいかもね...と、お母さんぶって一人一人のスカーフを巻き直す。年頃の娘がたかさんでできた気分。わくわくする。

18:15 ごろ BLP の車が来る。すでにガナパティさん、パイさんが乗っていて、BLP カーに乗り切れないメンバーが後ろからタクシーで追いかける形で、タージマハールホテルへ。（ホテルのフロントに、BLP への募金箱！）前日の予約が出来ず、席があるかとヒヤヒヤしたが、無事大きなテーブルに全員着席。（レストランの人がしづるのに、3つのテーブルを無理矢理くっつけた。厚かましいくらいで丁度いいと、昨日学んだ。ごめんなさい）21日、22日と、ムンバイではクリケット（野球に似たスポーツ）の世界大会？が行われており、選手一同タージマハールホテルに宿泊中。（昨日は選手到着時にこのホテルに居合わせ、市民が選手を一目見ようと大挙して騒いでいる光景を目にした。私は、本来なら、この隣の Regent ホテルにいるはずだったのだ。予約もしていたのに、出発4日前に一方的に解約された。きっとタージマハールホテルに泊まり切れなかったクリケット関係者が Regent にも流れたのだ）

レストランで、クリケット選手が“普通に”食事しているのを見たガナパティさんとパイさんは、いそいそと選手のテーブルに寄って行き、大きな態度で堂々と挨拶。

“ガナパティさんとパイさんは、実はミーハーだった”という証拠写真を撮ってやろう、とカメラを向けると、お二人は喜んで選手をカメラに向き合わせ、自分たちと一緒に並ばせて「上手に撮れよ」とポーズ。「写真はすぐ送るように」と本気で言われ、うまくフラッシュが光らず、撮れていなかったら私はどうなるの、と不安になる。（案の定、帰ってから現像したら“影絵”になっていた。わー、どうしよう）

一流ホテルのインド料理はやっぱり美味しい。（ホテルに帰ってから計算したら、一人500ルピー=1500円位？だった）キングフィッシャーという銘柄のインドビールで乾杯。

ガナパティさんは、若い学生たちに、噛んで含めるように BLP の理念を話された。BLP は、パキスタンやイランにも、ハンセン病患者のための薬や治療のアドバイスなどを送ったりしているようだ。

「政治や宗教を越えた“人間のつながり”で、世界からハンセン病をなくしていくことが、75歳の私の、信念だ」と断言される。寄付だけで成り立っている BLP の活動。年によって寄付の額も異なり、農村（ルーラルエリア）への取り組みも、資金不足から今は半分休止中とか。これまで、拡張したり縮小させたりしながら、30年間この活動を“やめなかった”ガナパティさんのすごさを改めて感じる。

「私の幸せは、パートナーに恵まれたことだ」とパイさんを見られ、ああ、いいなあと思った。

3人の医師、10人の専属スタッフ、たくさんのボランティア、その中心に居続けるガナパティさん...。いいかげんに見えても、インド人には、中心がぶれない人が多いなあと思う。

今年度後半期分（2006年3月～9月）の教室運営資金を手渡す。今回の旅の、私の最大の任務。

（次から銀行口座に振り込むことにする。“振込み記録”が残る方が“領収証”より確実なので）

いつもなら、このディナーの席で、これからの運営について話し合うのだが、出発前、めぐむさんにスケジュールを報告したら、「ディナーは岡山大の人たちを中心に考えた方がいいよ。難しい話は22日に義村さんが来てから改めて、にしたら」とアドバイスを受けた。その通りにして良かったと感じる。

22:00 ガナパティさん、パイさん、ともに「今日は本当に楽しかった」と満足して BLP の車で帰られた。私たちはバザールまで。かなり無理に岡山大の人たちを買い物につき合わせてしまった。（ほとんど日本で頼まれた物が買えていないんだもの）でも、お店は半分以上閉まっていて、結局ブドウとトマトを人数分買い、若い人たちにプレゼント。（果物や野菜がちょっとあると楽ですよ）23:00 タクシーでホテルへ。皆さん、今日一日本当にお疲れ様でした。

夜中、義村さんからホテルに電話。無事ムンバイ入りして、23:00 ごろホテルに着いたとのこと。

明日朝の、BLP のお迎えについて伝える。

スリリングなホテルでの2日間、何とか終了。いや良かった良かった、とホッとする。

3月22日(水)



【ムンバイ (IC630) アーメダバード】



皆さん、お気をつけて

8:00 岡山大学の一行と、最後の朝ごはん。皆さんとは、今日でお別れ。改めて、何故「光の教室」が始まったのか、話してほしいと言われ、またむきになって話してしまう。光明園の千島さんや金地さん、たくさんの苦しんできた療養所の人たちのこと、この人たちの気持ちから、インドの子どもたちへの就学支援が生まれたことを、若い人たちに伝えたいと思う。すぐには分からなくても、“聞いた”という体験が大切。(だと思う...)

今日これから、岡田さんと彼女たちは、10:00 すぎにチェックアウトして、ムンバイの“マニ・ババン” (ガンジーが、ムンバイで定宿にしていた家 現在ガンジーの記念館になっている)などを観光した後、夜中の飛行機でコルカタ (カルカッタ)に行かれるそう。コルカタではマザー・テレサの施設でボランティアをされる予定とのこと。強行軍のようですが、どうか無理しないでくださいね。

9:20 チェックアウト。油断のならないホテルではあったが、スタッフのおじさん、お兄さんたち、どこか間が抜けていて、とても面白いところでもあった。(また泊まろうとは思わないが) お別れに、フロントの“手品おじさん”に、約束通りもう一回“5ルピー落とし”をやってもらった。「写真撮ってもいい？」と訊くと、「絶対にだめだ」そこにいた別のおじさんに「お前、写真に写れよ」と言われ、手品おじさんは仕方なく、緊張しながらやってくれた。前より下手くそ。気の毒になり、手品が終わってから改めて写真を撮ってあげた。(おじさんはシャイだった。恥しいのか、下を向いて写っていた)

私のこれからの予定は、9:30、BLP カーにここ Sea Load ホテルでピックアップしてもらい、10:00 に義村さんを Sea Green ホテル (紛らわしい) でピックアップ。そして再びモンズークラスを訪問。

9:30 から、お迎えを待つフロント周辺やホテルの前をうろろう。その間、岡山大のキヨさんが、昨日のディナー代 (500 ルピー × 8人分) を渡しに来てくれた。お手紙も付いていた。「子どもたちのきらきらした笑顔にノックアウトされました。残りの10日間で、更にインドやハンセン病についての知識を深め、タクシーの運転手さんにも競り勝ち、思いっきり楽しんで帰ります」という内容。(本当に本当にそうしてください！)

BLP カーは、10:00 を大分過ぎてやっと到着。車の中に義村さんがいた。ピックアップの順序が逆になっただけ。いつも突然変更だな。(それでも最後に辻褄は合うからいいのか...)

義村さんは Sea Load ホテルを見上げて、「すごいところに泊まったんですね～」と感心している。このホテルのすごさを詳しく説明したかったが、まだフロント前に岡山大の人たちがいたので、「ご挨拶だけでも...」と義村さんをホテルの中に引っぱって行く。出発前、ホテルの予約について、岡田さんとの間でメールのやりとりもされたことだし、ここですれ違ってしまうのはもったいない。

岡山大学の皆さんと、「これから何とかご無事で！」と激励を交わし、義村さんと私は BLP カーに乗り、モンズークラスへ。

再度モンズークラス ~ブレイクダンス付き~

10:30 義村さん、初めての教室訪問。「うわ、想像していたのと全然違う！」と義村さんは、都会の真ん中に、別世界のように広がるアクウォース病院の静かな景色にびっくりしていた。(昨日、岡山大の人たちも、「ムンバイで初めて静かなところに来た」と言っておられたな~)

ここは、かなり広大な敷地の中に、患者の居住棟 (男女は別)、病棟、ホールなどがあり、日本の療養所とよく似ている。(一画はエイズ患者の居住地区にもなっている) 決定的に違うのは、ここにいるハンセン病患者の人たちは、町では生活できないほど病気が進行したり、貧しかったりするだけで、“隔離”ではない、という点だ。ハンセン病のミュージアムもあり、形としては、東京の多磨全生園のようでもある。設立も 1890 年と、日本と同時期。(設立者はイギリス人のアクウォースさん) モンズークラス (光の教室) は、この病院の院長の許可を得て、敷地の一角に建てられたトタン屋根の小さな小屋。

今日は、昨日より子どもの数が少ない。ミシンを使って縫い物をしている子もいて、“作業”に集中する日のようだ。私たちの他にも、もう一人訪問者がおられ、シスター・セラフィンは、「フランスから一時的に帰っている“元私たちの子ども”よ」と紹介して下さいました。28歳というインド人女性。（25日、改めてシスターから伺ったところによると、シスターはフランス人の家庭にムンバイの孤児を養子として送る活動もしてこられたとのこと。この時会った女性は、2歳の時、シスターの手からフランス人夫婦のもとに送られ、年に一度インドに里帰りしながら成人して、今は秘書としてフランスで立派に働いているのだとか）

クラスの子どもたちは、昨日も来た私を当たり前のように迎えてくれた。義村さん、あつという間に子どもの輪の中に引きずり込まれ、もみくちゃ。ここの子どもたちは本当に人なつっこい。わやわや、ガヤガヤしているうちにカセットデッキのボタンが押され、唐突に、年長の少年たちによるダンスが始まった。インド映画で踊られるセクシーなダンス。その中で、一人の少年が見事なブレイクダンスのポーズ！去年9月、大塚君が彼らに教えたブレイクダンス。短い講習だったのに、この少年はモノにしているじゃないの！とびっくり。うれしいなあ。大塚君に報告しなくては…。続いて少女たちのダンス。これもインド映画のダンスで、彼女たちは恥しそうにしながらも、とてもセクシーに腰をくねらせる。ちょっといやらしくない清潔な色気にドキッとす。

「ぞうさん」による“せっせっせ”の威力

小さい子も大きい子も、昨日の「ぞうさん」を覚えていて、歌ってくれた。しつこくやったかいたがあった。（…けれど、相変わらずメロディーがどこにあるのか分からない。）

『ああ、3拍子というリズムがわかってないんだ』と気づき、目の前にいた子どもたちと、順番に“せっせっせ”（手遊び）をしながら「ぞうさん」を歌ってみた。この子たちに出来る“せっせっせ”のやり方は、手を合わせる順序が日本とは違うが、歌と一緒に、とにかく複雑（？）な手の動作が出来るようになると、子どもたちは大喜び。すごいこと覚えた！という顔。見ていた子どもも「私も！」「ぼくも！」と、次々と大きな声で私と“せっせっせ”をやりたがり、1時間近く、数え切れないくらい何回も、たくさんの子と「ぞうさん」を歌い、“せっせっせ”をやり続けた。知的に障害があるらしい一人の男の子は、特に興奮して何度もやりたがり、輝くような笑顔。2、3歳の小さな子も、むちゃくちゃだが、簡単にアレンジして、その子たちなりに手を合わせられるようになると、本当にうれしそうだった。

ヒンディー語版「ぞうさん」、何十回となく繰り返されるうちに、次第に調子の良い3拍子になってくる。“せっせっせ”って、偉大な遊びだったのね～



ベット？

12:30 昼食の時間になり、子どもたちと外へ。今日は野菜のカレー。（昨日は豆のカレー）肉はめったに入らないのかしら。ご飯の上に黄色の薄いカレーをかけた一皿が、この子たちの今日一日の最大のご馳走。台所をのぞくと、日本からの支援金で去年取り付けられた蛍光灯が消えている。電球が切れたままだしい。（あとで、接触が悪かっただけ、と判明する）

子どもたち、お風呂で使うような小さなプラスチックの椅子を女の子の列の中に置いて、私に、そこに座れと言う。さっきの“せっせっせ”で興奮していた男の子が、向かいの列から大きな声で「ゆり！」と私を呼ぶ。つられて、あちこちからゆりコール。ほいほいと呼ばれた方に寄って行っては、子どものお皿からカレーをもらっていたら（もらうなよ）、年長の少年が、私のために一皿持って来た。（よっぽど欲しがっていると思われたのね）『これからランチに行くから、いらないんだけどね』と思いながら、私も給食をいただくことに。子どもたちが、どんどん私の口に手づかみでカレーを入れてくれるので、お腹はすでに一杯で、私のお皿はいつの間にか義村さんの膝の上に移動していた。

「西村さーん、食べちゃいますよー」と、のんきな声を出しながら、義村さんは一皿食べてしまった。

四方八方から大声で「ゆり」と呼ばれ、その都度寄って行く私を見て「西村さん、まるで子どものベットですね」と、義村さんは呆れていた。

BLP とのランチ・事業についての話し合い

義村さんにとっては、初めてのアクウォース病院訪問なので、ミュージアムを見学してから、車で街へ。今日はガナパティさん、パイさん、ラオさん、義村さん、私で、ランチをとりながら事業の進め方などを話し合う予定。義村さんが一緒なのでとても気持ちが楽。（話し合いの内容は、別紙で報告）

ペニンシュラ（2004年に15人でオペレッタを上演した翌日、キングスレーさんに連れてきてもらったレストラン。あの時はメニューを見て高い！となり、近くの別のレストランに行ったのだった）で、BLPの3人のお医者さんと義村さん、私の5人、ランチしながらのディスカッションを続け、2007年に企画する“イベント”について、ハリウッド（インド版ハリウッド 映画の都 ということ、ムンバイ=ボンベイはこうも呼ばれている）のスターを呼んではいかがでしょうか、とか話が広がっていく。私としては、まじめに、2007年10月以降も続けていけるよう、ここでイベントを打って社会へのアピールができれば、と思っているのだけれど...。（NPO法人化、新たな支援者さがしなど、この一年、更なる継続のために、日本では運営委員一同、本当に苦しんで考え続けている）私の英語が“変”で、時々話が迷走しそうになったりしたが、義村さんのおかげでBLPのこと、ガナパティさん、パイさんの考えなど、今まで以上に良く分かり、有意義なディスカッションになった（と思う）。

15:00 義村さんと私は、夕方の飛行機でアーメダバードに行くため、レストランを出てBLPの車で国内線空港へ。途中、ガナパティさんとパイさんが「オフィスに寄れ」と言う。何で？と訊いたら、「昨日タージホテルでクリケット選手と撮った写真のデータを、コンピューターに取り込む」（この二人、ほんとうに“ミーハー”なのだ）「でも、あの時使ったのはデジカメじゃなくて、インスタントカメラですよ」と言うと、二人ともひどく落胆していた。

アーメダバード・Ambassador ホテル

18:30 IC603機は1時間遅れでアーメダバード着。義村さんのジェット・エアはどうなったかと、空港の人に訊くと、同じくらい遅れていて「あと5分で着くよ」とのこと。

川根さんに電話をしようとするが、空港の公衆電話は故障中。空港のおじさんがえらく親切で、「友人に電話がかけなくて困ってるんだけど」と言うと、オフィスに連れていってくれて、直接かけてくれた。すぐ友さんの携帯につながり、明るい友さんの声「もう家を出ちゃってます。ホテルでお会いしましょう」

そのうちに義村さんも到着。アンバサダーホテルからの迎いのリムジンが、空港の外で待っていてくれた。空港を出たところで、11歳だという2人の風船売りの女の子と友達になる。「お名前は？」のたった一言（ヒンディー語ですぐ出てくるのはこれのみ）だけで、何人の人、子どもと仲良くなれたことだろう。言葉って大切だと本当に思う。風船はいらないので買ってあげられなかったけれど、2人とも手を振って私たちの車を見送ってくれた。

去年9月以来のアンバサダーホテル。前にもいた調子のいいおじさん、相変わらずの、油断のならない笑顔でフロントに立っている。何と「今晚だけ2人でデラックスなスイートルームに移らないか？」（!?!）義村さん、必死の抗議。（^^；断るにしても、そこまでむきにならなくても...）

Regent Hotelの解約もそうだったのだろうと思うが、インドでは、後から来ても、声と態度の大きい人が優先されることがよくあるそうだ。（義村さんは、一度車で旅行した時、予約したはずの席にインド人の家族が堂々と座っていてどいてくれず、この4人家族の一番隅で、固い木のベンチの上で小さくなって4時間過ごしたそうだ）きっとこのホテルも、私たちの予約を受けたあとで誰かが割り込んできて、普通のシングル2部屋が確保できなくなったんだ！ 結局、私が1Fのスイートルーム（ここでは“広い”というだけの意味）、義村さんが2Fの、エアコンなしの小さい部屋になる。（ごめんなさい。こういうときの女性優先って不公平ですね。じゃんけんすれば良かったです）

アーメダバード・ザ・不思議ワールド

友さんから「一家でホテルに来ている」と部屋に電話。シャワーを浴びる間も荷物を解く間もなく、大急ぎでTシャツだけ着替えてロビーに出ると、友さんご一家と義村さん、フロント前のソファに座って、コーヒーを飲みながら歓談中。

フィアーナちゃん(11歳)、ナイシャちゃん(8歳)、相変わらずとっても可愛い。小さなアイゼンカちゃん(3歳)は、お父さんの膝の上。三人のお嬢さんそれぞれに、小さなタオルと私が作ったビーズの腕輪をプレゼント。フィアーナちゃん、ナイシャちゃん喜んでくれた。アイゼンカちゃんが舌足らずに発する「かわいい」という声 genuinely 愛らしい。(友さんは、私が作った変なポーチに大笑いしておられた)ご主人のプレム・クマールさんは、明日の夜、友さんがお嬢さんたちを連れて日本への里帰りに発たれるせいか、少しだけ淋しそうにも見えた。友さん宅(?)の車で、食事のためホテルを出る。

途中、ご夫妻のお友達というインド人のお医者様夫婦をピックアップし、かなり走って車が止まったのは、暗い一本道の前だった。「え? レストランはどこ?」道の両側に、ぼやけたオレンジ色のランタンの灯り。そこは、まるでゲゲゲの鬼太郎の世界。“幽界の入り口”のようだった。道を奥へと進みながら「おばけが出そうね。怖くない?」とフィアーナちゃん、ナイシャちゃんに訊くと、「全然!」(この二人、いらぬことを怖がったりはしないらしい。すごいな。)

道の奥には不思議な空間が広がっていた。

全体が小さな村のような造りになっていて、張り巡らせた線に、無数のランタンが吊られ、グジャラート州の特産品や、美しいサリーを売る小さな店などがある。

「美術館がありますけど、見ます?」と友さんに誘われ、美術館に。グジャラートの伝統的な生活用具をたくさん集めた美術館。くるみ割りの道具の、大きさ・形の多彩さ、バターを作る道具、大きなカメ...その他、造形的に、本当にスタイリッシュな道具の数々。ガイドさんの説明付きでとても面白かった。“生活”の道具って、なんでこんなに美しいんだろうと改めて思った。美術館の中央には大きな池があり、何故かたくさんのガチョウが立ったまま寝ていた。アイゼンカちゃんは展示物より“ガーちゃん”に夢中。

そのあと、村の一画に広がる野原のようなところで、民俗楽器の演奏を聴きながらレモネード(のようなもの)をいただく。ランタンの灯り、涼しい夜風、暗闇でうごめく人の影...ここ面白いなあ。

真っ暗に近い中で、フィアーナちゃんとナイシャちゃんはブランコで遊んでおり、私も入れてもらった。籐で編んだ50cm四方位の座布団?に座ってのブランコは、とても気持ち良かったが、ナイシャちゃんの座布団にはアイゼンカちゃんも座っており、落ちないかとヒヤヒヤ。二人とも平気でかなり高くこいでいた。

大騒ぎのパペットショー

この広場の手前に小さなパペット(人形劇)のスペースがあったのが気になり、一人でフラッとそこに行ってみた。グジャラートの伝統的人形劇(多分)なのだろう。幕の中には、60cm位の高さの、ちょっと怖い感じの人形が並んで吊り下げられ、幕の前におじさんが一人。「見るか?」「うん」で始まった人形劇。私はおじさんに促され、幕のまん前の特等席で一人で鑑賞、という贅沢なシチュエーション。

いきなりすっとんきょうな笛の音。ピーピーとヒステリックに上下する音に合わせ、一体の人形が生き物のように踊り出した。すごい!人形の動きのおかしさに大笑いしてしまう。私の反応に気を良くしたのか、パペットショーはどんどん異常な世界に入っていく、代わるがわる人形たちがとんでもない踊りを披露。我を忘れて声をあげる私。ふと気付くと小さな小屋(屋根と柱しかない)の中はお客さんで一杯。何故かみんな、人形劇ではなく私を見ていた。「ほれ、今度は上から人形が出てきたぞ」と、横の人、親切に教えてくれる。上を見ると、幕のてっぺんで、一体の人形が私を見下ろしていた。いつの間に?!

ピーピーの音は最高潮!ついに舞台からコブラが飛んできた。(それも私めがけて)小屋の中、大笑いの大騒ぎになる。これは怖い!こんなの初めて!

自分が“大人”だったことを突然思い出し、この状況はかなり恥しいのではないかとやっと気付く(遅い!)「ありがとう」とお礼を言って、そそくさと出ようとしたら、友さん一家とお医者様夫婦、ニコニコしながら後ろの方に立っておられた。「ゆりさんがいない」と探していたら、フィアーナちゃんが、大騒ぎのパペット小屋の中央にいる私を見つけたのだとか。(「ゆりさん、子どもに見えた」と、子どものフィアーナちゃんに言われてしまった)

地面に座って、グジャラート風のディナーをいただき、(“ギー”という油をかけて食べる)なごりを惜しみながら不思議ワールドを後にする。友さんが連れて来てくださらなかったら、この地にこんな場所があることを永久に知らなかったかもしれない。日本への出発前のお忙しい中での、義村さんと私への、ご夫婦のお心遣いに深く感謝する。(途中行方不明になって申し訳ありませんでした)長い一日、やっと幕。

3月23日(木)

〔アーメダバード〕

超ゆっくりの朝ごはん

何故か早く起きてしまい、5:30 ごろから、記録(これ一完全な日記)を清書しとかなきゃ、とベッドの上で、書き散らしたメモを整理する。“あったこと”を順番に書くだけでも結構大変で、頭も手も、上手く働かない。ノートの字が“ミミズ”になっているのを見て放り出した。ぼーっとしていたところへ7:15 義村さんから電話。「さっき散歩に出たら、すてきな場所を見つけました。そこで朝ごはん食べませんか？」パッと目が覚め、急いで着替えて、7:30 二人で街へ。

レストランは、旧いきれいなヨーロッパ風の建物。“Green House”と看板にあり、2階から上は、ホテルになっている模様。緑に囲まれた屋外のテラスですてきな朝ごはん。コンチネンタルとアメリカンブレイクファーストしかないと言われたが、「せっかくインドなんだから」と、二人それぞれ、“インド料理” 義村さんがドーサ、私が白いパンケーキのようなものを無理矢理注文。この国では何でも“言ってみる”ことが大切だ。(大抵なんとかなっている)

英国風のホテルを見上げながら、テラスのベンチで風に吹かれていると、動きたくなくなってきた。...で、結局2時間以上もそこにいることに...。「こんな長い朝ごはん初めてです」もちろん私もです。(移動のない日って本当に気楽だ)

二人の小さなレディーたち

今日は、友さんが、荷造りでお忙しいので、フィアーナちゃんとナイシャちゃんが、私たちの“買い物”のガイドをしてくれる予定。10:30 に、二人を乗せた友さん宅の車がホテルに来てくれるとのことなので、10:00 前にやっとレストランを出てホテルに戻る。

時間通りに車がホテルに。二人の小さなレディーたち、ドライバーさんにきちんと行き先を告げ、私たちを大きな店に連れて行ってくれた。昨夜、友さんに「日本でサリーを頼まれた」と言ったからだろう、上質のサリーやショールが揃った立派なお店。ただ、私が頼まれたのは、“切って、スカーフをいっぱい作る”ためのサリーだったので、ここの商品はもったいないかも...。それでも、30%バーゲンというコトンのサリーと、繊細な柄の絹のショール(これも頼まれたもの)を一枚ずつ買った。

ここアーメダバードは織物産業の町。非常に美しい特徴的なデザインのストールがあって、義村さんは、「日本でも喜ばれそうだな」と数枚まとめて購入。続いて入った別のお店(ここは民芸品や小物の品揃えが豊富)でも、「これ、日本でも売れそうですよ」と、面白い携帯電話用のポシェットを私の手に...

ユーモラスな鬼?の人形が付いていて、そのトボケ具合がおかしい。確かにいいかも...

“フェアトレード”*に関心の強い義村さんが、“日本人に買いやすく喜ばれそうなもの”を、いくつも選んで下さって、やっとインドで納得のいく買い物が出来た。(この旅行での買い物は、日本で、事業資金のささやかな“足し”にする“販売品の仕入れ”が目的だ。また、昨日モンスークラスで、シスター・セラフィンに「子どもたちが作った裁縫の作品を日本で宣伝して売ってほしい」と頼まれたので、“どんなものが売れそうか”シスターに提案するため、“サンプルを集める”、という目的もあった。買い物得意ではない私。この任務、不安だったが、義村さんが一緒に本当に助かった)

*適切な価格での取引?それを通しての途上国支援。NPO 等を通して行われているものとして、コーヒー豆の輸入が、よく知られている

“心づかい”の仕方を学ぶ

12:00 ヒンディー語、グジャラート語、英語、日本語を話す小さなレディーたち。“ガイド”の役割を、完璧に心得ていて、買い物のおと、レストランに案内してくれた。

二人のお気に入りの料理と、ライムソーダ(これも二人のお気に入り)のランチ。楽しく食事しながら、義村さんが、「大きくなったら何になりたいの?」と二人に尋ねた。

フィアーナちゃんは、少し考えてから「お医者さん。お父さんのお仕事を助けられるから」(友さんの旦那様であるプレムさんは、1985年から、友さんとともに、“Friends Of All”という名のNGOを主宰されている)ナイシャちゃんは「スポーツ選手。私、フィアーナちゃんに走るの勝てるよ」素直で本当に可愛い。

「あ！」と突然ナイシャちゃんが手で口を押さえ、「大変だ！」フィアーナちゃんとグジャラート語(?)で何やら焦って話している。「どうしたの？」と訊くと、「ドライバーさんのごはん忘れてた！」車の運転手さんにも昼食を食べさせるようお父さんから言われていたのに、ごはんは夢中で忘れていたらしい。あとで義村さんが言っていたが、ドライバーの食事にまで気配りするインド人は、そうはいないとか…。それが自然に出来、子どもにきちんと伝えるプレムさん、お父さんの言いつけを、一生懸命守る二人、どっちもすてき、と思った。「川根さんはいい子育てをしていますね」同感です。二人は大急ぎで外に出て、車にいたドライバーさんを店に招き入れ、彼が、ちゃんとごはんを食べられるようお店の人に頼んでいた。

13:00、アーメダバードに暮らしておられ、間もなく帰国されるという総領事館時代のお友達と会われるため、義村さんだけレストランを退出。夜にはまたホテルに戻られるが、二人とはしばらくお別れ。次に会われる日が楽しみです。(きっとこの二人、ますますすてきなレディになっていますよ)

私は引き続き、小さな淑女たちとの会話を楽しんだ。

フィアーナちゃんは、インドダンスを習っているようで、美しい手の運びを見せてくれた。うっとりするほど神秘的な動き。幼い時から自国の文化を体に入れるって大切なことだなあと思う。どんなに急速に社会が変わっても、自分の中に根を下ろしている人は強いだろう。『いつか大きくなって、彼女たちが、ムンバイの教室にも来てくれる日があるといいな』と思った。(まず、それまで続けていなければ...)

「美術館に行く？」とナイシャちゃんが誘ってくれたが、この二人も、今夜遅く日本行きの飛行機に乗るはず。あまり疲れさせても...と、「ありがとう。今日はここで大丈夫。ホテルに戻るね」ナイシャちゃん「ゆりさん、一人で大丈夫？」うっ、優しい(というか、情けない...)

ひまな時間の無駄な使い方

部屋に戻って、つくづく考えた。

今回もそうだが、これまでインドで会ってきた人たち、どの人も、どんなに親切で温かかったことだろう。懐が深く、表裏のないその人たちの厚意に、どれだけ助けられてきたか。私に出来ることは何だろう...

ふと、20日、メタさんが「童話を作ったのよ」と聞かせてくださった“二匹のネコのお話”を思い出す。『そうだ、あれ、絵本にして、メタさんにプレゼントしよう!』トランクをごそごそやって、小さい色画用紙の束を見つけ出し、早速“ネコ”の絵を描く。色鉛筆持ってくるのを忘れた!そのまま外へ...ホテルの近くの雑貨屋さんでいかにインド的なスケッチペンのセットを買い、部屋に戻って作業に没頭。

“ひま”が出来ると必ず手を動かしたくなり、必ず、変なモノを作ってしまう私。吐き気までしてきたのに、生理的なことすら放っておく。(いつもそうかも...)何を考えているのか、せっかくの“寝られる時間”を無駄にし、3時間後、途中まで完成した“変な絵本”を見ながら脱力。...何だコレ?

3月24日(金)

{ アーメダバード (AI860) ムンバイ }

**** せっかくの休養日にわざわざ疲れた私と、久しぶりに会われたお友達と、あのあとマクドナルドのハンバーガーを食べたという義村さん。23日の夕食は、すぐ近くのホテルのティールームで軽く済ませ、この日の朝も、「インド料理はパスしましょうか」と、昨日と同じレストランのテラスで“アメリカンブレイクファースト”(野菜や果物がたっぷり付いていてかえって良かった)。そろそろ体中に疲れが出ているのを感じるが、今日の予定はハード。友さんのお主人、プレムさんが、車で“女子校”に連れて行ってくださるのだ。友さんとプレムさんが、校舎の“レンガ積み”から協力したというところ。市街から、車で2時間近く離れた田舎にある学校だ。ご夫婦の活動の跡も見せていただけるし、いまひとつよく分からなかったインドの“公教育”についてもたくさん学べる機会。まだまだバテてはいられない****

プレムさんによる大事な“予習”

9:30、約束通り、プレムさんが車でホテルまで来てくださった。

今日は、女子校訪問のあと、そのまま飛行機でムンバイに戻るので、ホテルのチェックアウトも済ませ、ホテルのスタッフの人に見送られながら、大きな車に二人分のトランクを積み込んで出発。

「昨日空港で別れる時、アイゼンカが『パパ、パパ』と泣いて切なかったよ」とプレムさん。本当に仲の良いご家族だから、1ヶ月も離れておられるのはお辛いだろうなと思った。(…が、夕方空港でお別れるまで、プレムさんは元気一杯。NGOを率いるリーダーとしての、資質と人間性を、一日中余すところなく見せてくださった。)

まず、22日にもご一緒したお友達のお医者様夫婦をピックアップするため、このご夫婦のお宅へ。きれいなマンションの一室で、マサラティー(チャイ)をいただきながら、色々なお話を伺う。(英語力の不足で半分も聞き取れなかったが、インドについて学び、とても良い学校訪問の“予習”にはなった《?》)

アーメダバードは、70年前、テキスタイル(織物)産業で発展した町とのこと。(プレムさんのお話は、すぐに“現代のインドが抱える問題”へと移っていった。私のメモは、即支離滅裂に…。熱のこもったお話だったのに、以下、聞き取れたことのみを報告。すみません。)

60万人ものアンタタッチャブル(不可触民)が存在するというインド。
しかし、直面する課題は、ヒンズー教徒(ヒンディー)と、イスラム教徒(ムスリム)の平和的共存だ。

(世界中でそうらしいが)インドに於いては、両者は厳密に分けられており、圧倒的にヒンズー教徒の数が多いため、イスラム教徒は住みにくく、常に移動しているという。(インド パキスタン間の政治的緊張という大きな問題も、この両者の対立から生じている)「どうすればいいのでしょうか」と、義村さんが質問すると、「まず、“自由な人の行き来”が大切だ」とプレムさんは即答された。「3つのことが大事なんだ。」(以後、どんな難しい質問に対しても、その都度この方は「3つのこと」をあげ、解決の道筋をはっきり示された) 尊敬すべき相手の文化を知る、 人同士が交流する、 困っている隣人のことを知る

様々な体験や事例をあげながらの力強い言葉の数々。そばで、お友達のドクターも、うんうん、と頷きながらご自身の経験を話してくださる。ヒンディーとムスリムの対立に関し、この方自身、1981年に、自宅に放火されるという目に遭っていた。改めて、大変な国だと思った。プレムさん、去年の9月に初めてお会いした時も、personal touch(直接的な人と人との触れ合い)という言葉で、何回もおっしゃっていたが、大上段に構えるのではなく、問題の根をその視点からシンプルにとらえ、出来ることから“行動”される方である。(「カリスマ性がありますねえ」と義村さんが感嘆していたが、私も本当にそう思った)

ピクニック～豆の名前か、人の名か?～

とても有意義なお話を聞かせていただいていると感じながら、『いつ出発するの?』と訝しく思う私。インドの人って、本当に時間の使い方がゆったりしている。そして行動に移る時もごく自然。「ほな、行きまひょか」という感じ。(いつも唐突に次が始まるので、慌ててしまう)奥様も一緒にやっと車に乗り込み、学校へ。

ドライバーさんと並んで前の席に座ったお医者様夫婦は、後ろにいるプレムさんと義村さんと私に、水のボトルを回してくださった。「まあ用意の良し!ありがとうございます」と回し飲みしていたら、次に、豆の入ったお弁当箱が回ってきた。「まるでピクニックですね」この豆が大好きそうな義村さんと、香ばしくおいしい緑色の豆を楽しむ。『このお医者様、お名前をまだ知らないなあ』と、プレムさんとお医者様の、楽しそうな現地語?の会話に耳をすませ、それらしき音をキャッチする。あ分かった!この方の名前は、“チャガーニーさん”だ。(もしかしたら、それは、この時食べていた豆の名前だったかもしれない... それならドクター・豆(ダル)だ。別に問題はない。《あるぞ》)

女子校“Run”・“くるぶしにキス”という素敵な仕草

ところどころ、工事で穴ぼこになった道を迂回しながら2時間近く走り続けて、“女子校”に到着。車中ずっとプレムさんのお話を聞く。これから訪ねる学校は“Run”(“ルン”と発音する)という名前の女子校で、8年生～12年生までの女の子が通っているそうだ。1981年に、州からのお金と、ローカル寺院からの寄付によって、2人のインド人により設立されたということだが、それ以前この地域には女子校がなく、7年生以上に進学する女の子はほとんどなかったとのこと。“Friends Of All”は、1990年、ここで3週間のキャンプを行い、フランスやドイツ、オーストラリア、カナダ、アメリカ等からのボランティアを集めて、学校を文字通り“建てる”作業をされたそうだ。(それ以前は校舎がなかったのかな?)

学校の敷地に入ると、すぐ少女たちの群れに捕まった。訳の分からないうちに取り囲まれ、何故か自己紹介代わりに歌う私。少女たち大喜びしているが、自分では『私、何やってるの?』少女たちに引っ張られ、そのまま校舎の方に…。この国の子どもは、やはりすごい。

モンズークラスの子どもたちもそうだったが、この学校の生徒たちも、写真を撮られるのが本当に好き。校舎の前で何枚も撮ってもらって大喜びしている彼女たちに、「ところで私のお友達、みんなどこにいるか、知ってる?」と尋ねる。校長室のようなところを指さされ、「またあとでね」と急いでそこへ…。

のっけからの勝手な行動。皆様すみません。(誰も気にしていなかった)



校長室?で全員揃い、チャイをいただきながら、改めてインドの学校制度のことを聞く。(ここでもプレムさんの説明)インドでは、1~7年生が初等教育にあたり、ここまでは男女一緒だが、中学、高校にあたる8~12年生では、男女別れて教育を受ける。

(私立はどうか知らない)

この学校には現在 227 人の少女たちが学び、彼女たちは 10 年生 (15 歳) で州テストを受け、特別なラインに進んでいく。ほとんどの生徒が 10 年生で学校教育を終え、そこで結婚する子も多い。(男の子は勉強を続けるそうだが、女の子の場合、親がそれ以上のお金を教育に費やすことを嫌うのだとか。でも、現在では状況は変わってきているらしい)それでも 12 年生で卒業した生徒も、その後半数は結婚するのだとか。10 代で妻になり母になり…インドの女性にとって、大学教育 専門職という進路は、状況は変わっているとは言っても、限られた人だけに許されたことなのか…と改めて思う。

「インドの教育の問題点って何ですか?」と義村さんがプレムさんに訊く。例によって「3つある」

(私の体は、この時もう英語を聞き取る意志を失っていて、その3つが何だったのかよく分からなかった)

ここで、プレムさんが言われたポイントは、「初等教育の怠慢」ということだった(と思う)

初等教育の教員資格を持つ先生の、就業機会の確保?のため、大学を出て中等教育の資格を持つ先生が、8~12 年生を教え、1~7 年生は教えられない、というシステム。

「先生の 75% が不幸に見える」(これはムンバイの VOICE NGO で活動されていた加藤先生からも、聞いたことがある。インドの小学校の先生は、生活のためにアルバイトを余儀なくされることも多いとか)例によって解決策も 3 つあった。政府は初等教育にお金を出すべきであること、先生の給料を良くすること、大学出の先生も自由に初等教育に関われるシステムに変えること

この時、何人かの少女たちが、さーっと風のように部屋に入ってきた。校長先生の“くるぶし”に、身を屈めてキスをして出ていく。『今の何だったの?』今日はちょうど卒業?の“テスト”が行われた日とか。無事テストを終えた少女たちが、校長先生にお別れのあいさつをしたらしい。美しい仕草。インドの教育制度には、きっと大きな問題があるのだろう。でも、この挨拶の仕方を見て私は単純に感動してしまった。

『学校だけじゃなくて、この子たちは“インド”という国自体に、しっかり教育されている』と感じた。

再びペット

義村さんとプレムさん、話に興中され、Dr. チャガーニー(豆?)と奥様は、いつの間にか外へ。私も…、と校長室を脱け出し、再び少女たちのところへ。何と人なつこい女の子たち! わいわいと私を校舎の中に連れて行き、教室をひとつひとつ案内してくれた。椅子も机もなく、黒板すらない部屋もある。きっとみんな床に座って声を合わせて勉強しているのだろう。ある部屋の中に、泣いている女の子がいた。思わず「よしよし」と抱いたら、少女たち、何やら叫びながら、私を別の部屋に連行。そこにも泣いている子が!(やはり年頃の女の子たち。きっとけんかなんかもあるのだろう)「この子も抱いて!」感動しながら、この少女にも、「よしよし」… (“よしよし”された少女はとてもびっくりし、恥ずかしそうに笑い出した。(ここで我が子を教育してほしかった!)

モンズークラスでもやった“せっせっせ”、そして、めぐむさんと一生懸命覚えたヒンディー語の子どもの歌、「チュクチュクガリ」…出来ることを全てする。少女たち、完全に私をペットに…。

やっぱり「ぞうさん」のメロディーは覚えられない様子。でも、ここでも“せっせっせ”は大人気。

義村さんもいつの間にか加わって、小さな男の子(この子は生徒の弟なのだろう。一人だけ場違いな場所にいる状況なのに、とても自然に学校の中にいる)と“せっせっせ”をしている。「歌と一緒にやらなきゃ意味ないですよ」と言ったら「歌知りませんよ」この人にも、ヒンディー語版「ぞうさん」をお教へしておけば良かった。(義村さんの“せっせっせ”は格闘技のようだった) こんな時間がずーっと続く。

今日の時間割は、一体どうなっているのだろう??

その後、広い部屋で少女たちの優雅なお給仕で床に座って昼食をいただく。この学校にずっといたい気分。

お別れ会とトイレでの昼寝

13：30 頃、食事をいただいた広い部屋で、お別れ会が行われた。

プレムさんが今日ここを訪ねた一人一人について説明され、全校生に私たちの詳しい背景まで話された。義村さん、「これが彼らのやり方なんです」と言う。“誰が”、“何のために”、今日、この学校に来たのか、その都度きちんと生徒に理解させるとのこと。視察だけしてすつと帰って行く、ということはないのだそうだ。このやり方にも“personal touch”の理念が反映されていると感じた。

訪問者一人一人が歌うことになり、びっくりする。まず、生徒の中から歌の上手な女の子三人が、代わることがわる、とても美しいインドの歌を歌ってくれた。どの歌も10番以上の歌詞があり、流れるような不思議なメロディー。西洋音楽のように分割されたリズムはない。何の伴奏の必要としない、人間の声のみの歌。聴いているうちに体中が熱くなる。歌う時、彼女たちは“大人”の顔になる。(息を呑むほど美しい子もいて、見とれてしまった)「ゆりさん、日本の歌を」と言われ、こんな見事な歌のあとでとても歌えないよ~と思うが、「庭の千草」を歌うことに。こんなに“音が少ない”歌(インド音楽には、12以上の音がある)にも、声楽の発声にも、初めて接したのだろう。会場が静まり返る。明るくしよう!と次に「ぞうさん」ネルー首相*の話もする。思いっきり大きな声で、全員、私と一緒に「ぞうさん」を歌ってくれた。

*この歌は、戦後すぐ、インドから上野動物園に贈られた、小象の“インディラ”-ネルーの娘=後のガンディー首相と同じ名前を歓迎して作られた歌なのだ

学校を去る段になって、義村さんが何事か考え込んでいた。「どうかしました?」と訊くと、さっき一緒に“せっせっせ”をやった小さな男の子が、「お母さんにも見せる!」と、義村さんを、待っていた母親のところまで連れて行き、そこで、また“せっせっせ”をやって喜んでいたのである。その後でチャガーニーさんの奥様から、「あの子のお父さん、最近亡くなったのよ」と聞かされたとか。「なんか、けなげですよね...」

帰途、日本の高速道路にあるサービスエリアそっくりの、モダンな休憩所に立ち寄ってひとやすみ。

ついに気分が悪くなりトイレへ。なんとボックスに入ってそのまま座って寝てしまった。10分近く夢の中!ぼけっと席に戻ると、「西村さん、魂が抜けたような顔してますよ」(きっと魂を学校に置いてきたんだ)冷たいコーヒーを飲んでで心地がつき、ホッとした。さあ!ムンバイに帰らなければ...

この時のコーヒー代を含め、何もかも、プレムさんと、Dr. チャガーニー(豆?)が負担された。

インド人のホスピタリティー(もてなしの心)に改めて深く感謝。

(私たちに出来たことは、“Friends Of All”へのわずかな寄付だけだった)



**** ムンバイへの帰途も、飛行機に乗る段階から、相変わらずのドタバタ劇が...。飛行場を間違えたり、(これは、インド国内便なのに、「国際空港」発着という、AI(エア・インディア)が悪い。《悪くない》)飛行機が、いつも通り遅れ、メタさんに、到着時刻の変更を電話で知らせたら、頭“もうろう”状態で、時間を言い間違えたり...。BLPのドライバーさんを、ムンバイの空港で、また2時間待たせてしまった。「ホンマに面倒なやっちゃ」と思っただろうなあ。ドライバーさん、ごめんなさい****

3月25日(土)

[ムンバイ (AI314) デリー 香港 関空]

バナナ

インド最終日。再びメタさんのお宅で朝を迎える。

5日ぶりのメタ家は、すでに、自宅のようにくつろげる場所になっていた。朝ごはんの席で、メタさんに、ヒンディー語を教えていただく。この方、常に大事なことしか言わない。私に必要な言葉だけ、ピシッと教えられた。まず、「アッチニナイ・ムゼ・アイ」(よく眠れた) 朝これを言うと、泊めた人が喜ぶ「シュークリヤ」(ありがとう) “ダンニャワード”も“ナマステ”も、いつも、もうひとつ伝わっていない気がしていたが、この言葉は伝わった。とても大事なひとこと「マエ・クシメー・フン」(I am happy) 説明するまでもなく、大切な言葉 “How are you?”にあたる「アープ・カー・セー?」は、「キヤー・ハール・ヘー?」より、インドの人に通じやすかった。(私以外の人なら通じるのかもしれない)

メタ家の3人のメイドさんの、覚えにくい名前をがんばって覚え、代わるがわる名前を呼んで、習ったばかりのヒンディー語を連発してみた。一気に親しくなる。(たった数語が通じるだけでこうなんだ) 食べ物に関してはケーラー(バナナ)しか覚えられず、メタ家で“ゆりはバナナ大好き!”ということに。

10:00にBLPからまたお迎えの車が来て、最後のモンスークラス訪問へ。

「一度15:00ごろ、ここに戻ってきます。日本への飛行機は夜の8時発だから、17:00まではいます」と、メタさんと一旦お別れ。とても淋しそうな顔をされ、「バナナを持って行きなさい」と言われた。(!) 『80歳近いメタさんも、これから会うシスター・セラフィンも(この方も80歳) まるでマザー・テレサのようだ』と感動しながら、BLPの車で、アクウォース病院に向かう。

ムンバイのマザー・テレサ

義村さんは、日本から“宿題”を携えてインドに来ておられた。当初、行きの飛行機の中で仕上がるはずだった“それ” イラン出張の報告書は、ムンバイでもアーメダバードでも、はかどらない様子だった。(結局日本に持って帰られるんじゃないか、と私は失礼なことを思っていた) 昨日は、「よかったら、メタさんのお宅と一緒に泊まりますか?」と言っていたのだが、お気に入りのホテル(“シャトー・ウィンザー”という大層な名前の宿。清潔で快適で“安い”とのこと)の予約が出来たとかで、昨晚は、そこで、レポートに取り組んでおられた(はずだ)

『そろそろ、“一人”になりたいんじゃないかなあ』と思っていたが、「シスター・セラフィンと、最後にきちんとお話ししたい」と言ったら、立ち合い人を買って出られ、今日、同行してくださる予定。この“話し合い”は大事なものになると思っていたので、最後まで義村さんの協力は、本当に嬉しい。

10:40アクウォース病院着。(今日は土曜日で、子どもたちはお休み)すぐに、義村さんも、BLPのカマートさんと登場。ぼーっと外に立っていたら、「いたんですか!」と驚かれた。(私は幽霊か?)

シスターも来られ、何故かカマートさんも一緒に教室へ。(この人、以前から、花谷めぐむと私は“要注意人物か?”と密かにマークしていた。ちょっと抜け目なく、冗談か本気か、時々変わったことを言うのだ) この時も、『あれ?シスターと私が何を話すのか、聞くために来たのかしら』と、一瞬怪しんだが、考えてみると、この人がここにいるのは当たり前のことだった。ガナパティさんもパイさんも、今朝は忙しくて来られない。この事業は、BLPと、シスター、光の音符の協働で進めているのだから、カマートさんは立派なBLP代表だったのだ。(この人について、私たちは、ひどい誤解をしていたのかも...とあとで猛反省する。この日、カマートさんは、本当に真剣に、シスターとの会話に加わり、きちんとガナパティ所長にその内容を報告された。とは言っても、やっぱりお調子者ではあった)

教室の中で、改めて、シスター・セラフィンと隣り合って座り、私は、「あなたの“これまで”のことを、聞かせていただけますか?」と、まずシスターに尋ねた。

「私の仕事は、ムンバイの“橋の下”から始まった。何十年前も前よ」シスター・セラフィンは、橋の下でレプロシー(ハンセン病患者)の子どもが物乞いをしている姿を見て、「この子たちのために働こう」と、思い立られたのだそうだ。子どもたちの親は“耳かき”(!)のカーストで、(インドの“カースト制”は“職業”の区分であり、職業によって厳然と階級が定められている。現在は、新しい職業 コンピューターのプログラマーや、マクドナルドの店員など も増え、かなり状況は変わってきているそうだが...) 橋の下の子どもたちは、非常に汚れていたそうだ。

ストリートチルドレンを保護するための“シェルター”(保護施設)が、まず必要だ、と考えたシスターは、アメリカやドイツのカトリック団体からお金を集めることから行動を開始された。“聖ヨゼフ会”(St. Joseph's Convey)という修道会(?)に属するシスターだが、基本的には一人で動かれ、資金や養子縁組などに関し、シスター自身が、カトリック系の団体に働きかけて、その都度協力を得てきた、ということのようだー

“ドンボスコ・センター”という団体から、古いガレージが払い下げられ、“シェルター”活動が始まったが、シスター・セラフィンは、同時にフランスの組織を動かし、インドの孤児と、フランスの家庭との“養子縁組”の取り組みも進められた。3月22日に、義村さんと私が、このモンスークラスで出会った28歳の女性も、2歳の時、シスターの手で、フランス人夫婦の養女として送られた“子ども”だったわけだが、シスターは養子縁組に際しては、必ず次の2つを条件とされているそうだ。

子どもを奴隷にしないで、娘(息子)にすること 休暇にはインドに送ること
(シスターは、「だって、子どもたちは“インド人”なのだから」と言っておられた)

『お一人で辛いことも多かったのでは...』と、80歳になるというシスターを見ながら思う。私の心を見透かしたかのように「私はマザー・テレサではないけれど、常に『マザー・テレサを思いなさい』と、自分に言い聞かせてきたわ」(マザー・テレサも、確かに“人を頼まず神を頼む”という方だった)

ふと、セント・キャサリズ・ホームのことを思った。あそこはカトリックの団体として、確実に組織化された、とても立派な施設だが、理念はシスター・セラフィンと全く同じだ
シスター・セラフィンは、“たった一人で”何十年も、あそこと同じ仕事を淡々と続けてこられたのだ...。どちらのやり方がいいか悪いかではなく、どちらも尊いと思う。そして、改めて、この人と会えたこと、この人がこんな経緯の中で始められた「モンスークラス」を、“BLP”という医療集団を協働者として、運営する機会が、私たちに与えられたこと...全てが“偶然”だっただけに、とても不思議な気持ちがあった。日本ではしんどいことも多いけれど、これは“喜びの事業”だと再確認。(私にとってこのことは、今回のインド訪問の大きな成果だった)

「あなたが永いあいだ、一生懸命に続けてこられた活動の延長にある“モンスークラス”ですが、そこにいきなり BLP や私たちが介入してきたことを、どう感じておられますか？」
訊きにくいことだが率直に質問した。(私たちは、これまで、全てのことを、BLP を通して決めてきた。シスター・セラフィンについても、「まず、この方を“追い出す”ようなことだけはしないでほしい」と、はじめから BLP に何度も言ってきた。Dr. パイの「シスターとはとても良い関係だ。彼女の悪いようにはしない」という言葉を信じてやってきたが、シスター自身の本当の思いをまだ一度も本人から聞いたことがないのだ)

「とても、とても嬉しく思っています」と、シスターは、言葉に力を込められた。
「子どもたちに医療のサポートがあるのは、素晴らしいことです」(ああ、本当にそうですね！)
話をしているうちに、自分の小心さが恥しくなってきたのだが、この人には、自分の実績に固執する気は毛頭ないようだった。「今まで色々なことをしてきたけれど、中には、ユニセフや、CCF(クリスチャン・チルドレン・ファンド)など、世界の50もの団体と一緒にやった活動もある」そうだったんだ！
だとしたら、“健康”の側面を BLP が、“教育”と“栄養”の側面をシスターが受け持ち、それらを支える“資金”を、光の音符(日本のハンセン病回復者の人たちや、社会の人も巻き込んで)が受け持つ、という今の形は、シスターにとっても、とても自然で、理に適ったことだったのだ。
それぞれが、自分の役割を心得、無理なく続けていけたら、それだけでも素晴らしいことではないか...

インドにいと、物事の“本質”を見る大切さをいつも思い出す。(21日に、子どもたちにプレゼントした“カード”について、日本で、「自分の絵が“カード”にされなかった子が傷つかないか」と、皆で、随分心配した。また、「シスターがしてこられたことを、横取りしていないか」と、ずっと気にもしていた。インドの人に、こういう気遣いは、あまり意味がなかったようだ。“本質”だけ考えていれば良かったんだ)

シスター・セラフィンにとって、BLP と光の音符の参入は、“天から降ってきた支援”であったことが、はっきり確認でき、『続けていれば何かが起こる。先が見えなくても、やれることを全てやればいいんだ！』と、明るい気持ちになれた。

最後に、アーメダバードで義村さんと買ってきた“サンプル”を、シスターに見ていただいて、販売品について話し合った。BLP から、モンズークラスに、ミシン数台の寄贈があり、カットワーク刺繍を施した枕カバーやランチマットなど、子どもの作品のレベルは格段に上がっている。(中には、プロの“仕立て屋さん”として独立できそうな“熟練者”の少年もいる)シスターは、子どもたちの作品を日本で売って欲しいと願っておられ、私も、日本人に、モンズークラスの子どもたちのことを伝える“手立て”にもなるので、これからシスターや子どもたちと一緒に、“日本人に買いやすく、使いやすい”魅力的な作品を作っていきたいと思う。多くは望めないと思うが、収益が子どもたちに還元されたら本当にすてきだ。「次にここに来る時には、日本人の好みや、枕カバーのサイズを細かく調べた“データ”を持ってきてね」了解しました！

秋までさよなら ~それぞれのひととの別れ方~

12:15 実り多かったシスターとの時間を反芻しながら、BLP の車で街中へ。車中、「大丈夫ですか？」と義村さんが訊く。今日の私は、幽霊のようらしい。(実際、体は限界)“オックスフォード・ブックスストア”という、近代的で、ヨーロッパ的な大きな本屋さんへ。このお店の中に、胃袋への負担の少ない、軽い食事のできるコーナーがあるそうだ。(義村さん、ムンバイには詳しい)おしゃれなテーブルで、チーズのサンドイッチを楽しむ。ヨーロッパのカフェみたい…。乱暴に書きなぐった記録ノートを開け、22日の“BLP との会談”のページの記述を、義村さんに、ひとつひとつチェックしていただいた。聞き逃したこと、理解し切れなかったこと、誤解していたことを、義村さんは丁寧に補足し、修正してくださった。(もう完璧に敬語!)『何て面白い縁なんだろう』と、改めて、義村さんを見てしまう。4年前にムンバイで会ってしまったのが運の尽き、えらいことに巻き込まれたと思っておられるのでは…。「報酬、お支払いしないといけませんね」と言ったら、怒られた。すみません。

帰りに、その本屋さんで“販売用”のレターセットやノートを買ひ、大急ぎで車に乗って、タージホテル近くのショッピング通りへ。改めて、岡山大学の女の子たちにプレゼントしたのと同じ、可愛いスカarf を 10 枚調達。「何とか予定していた物をみんな買えました。ありがとう！」その時、おじさんが寄ってきて、「お金」と手を差し出した。バッグから黒ずんだバナナを出して、その手に載せた。おじさん?? 「彼、バナナはいらなかったんじゃないですか」(とっさにサイフが出てこなかったんです)

14:00 義村さんはシャトー・ウィザーホテル近くで車を降り、「それじゃ」と、あっさりしたお別れ。4日も一緒にいてくださって、本当にありがとうございました。…でも、最後のまともな言葉が“バナナ”だったのはちょっとがっかりかも…。(義村さんは、この後3月28日までインドに滞在。“めぐむ食材”の大半を預かり、日本に持ち帰ってくださった)

15:00 BLP のオフィス。『本当はメタ家に帰ってる時間なんだけどなあ』と思うが、ずっと黙っていたドライバーさんが、「Dr. ガナパティが別れの挨拶をするそうだから、オフィスに連れていく」と強引(?)に連れてきたのだ。パイさんとカマートさん、「すぐにガナパティ所長が帰ってくるから待ってけ」…で、1時間待つことに。困ったな。荷作りこれからなんですけど…。待つ間、このお二人は、インドの言語について熱く私にレクチャーして下さる。インドに“カナダ”という土地があること、初めて知りました。言葉のことも、改めてその多様さに驚きました。でも…帰らないと飛行機が…と、一人焦るうち、やっとガナパティさん登場。いつもながら、堂々とお話され、私にガナパティ(ガネーシャ インドの象の姿をした神様)の人形をくださった。車のことも何もかも、本当にお世話になりました。彼の最後の言葉は、「おまえは早く帰りたいのか？」だった。(私、モゾモゾしていたのかなあ)

16:30 やっとメタ家へ。大慌てでシャワー(3月末のムンバイでは、半日外にいと汗と埃でヨレヨレになる)と荷作り。17:00 を過ぎてやっとメタさんと向き合う。アーメダバードで、途中まで作った絵本を見せると、メタさん大喜びしてくださったが、「私の話では、出てくるのはネコだけではない」と言われ、びっくり。何と“サル”も出てくるんだとか!「すみません。日本に帰って一から作り直してきます。」(タイトルを「二匹のネコの物語」にしてしまった)「秋にかならず“めぐむ”と一緒に来るのよ」

17:40 メタさんと抱き合っただけのお別れ。(“めぐむ”、ですけど…) BLP の車に乗り込むまで、メイドさん2人、楽しそうについてきてくれた。(あと一人は帰った後だった)車が見当たらず、「ガリ(車)どこ？」と探してくれる。大きな声で、私が「ガリー!ガリー!」と、車を呼んだら二人とも大笑い。スイタル、アニータ、お料理おいしかった。ネルマラにもよろしく!

車の窓越しに、インドで一番最後に叫んだ言葉は、この二人への「シュークリヤ!」(ありがとう)だった。